

特集

外陰疾患を極める

企画者のことば

久須美真紀*, 堤 治*

婦人科外来診療において、帯下異常や瘙痒はしばしば遭遇する主訴であり、日常的に対応する必要がある。日常診療であるがゆえに、大学病院や公立病院(大学関連病院)などの研修先ではその多くに触れずに研修を終えることもある。積極的に指導を受けることなく、研修を終えて、オフィス診療に携わるようになって初めてじっくり対峙する疾患も多い。皮膚科との境界領域であるが、外陰部に症状がある患者の多くは婦人科を受診すると考えられ、その初期対応は極めて重要で、婦人科必修知識と考える。粉瘤や疣贅、湿疹など通常の皮膚科診療として対応可能な疾患であり、難治例は紹介するなど共同して治療にあたる必要がある。瘙痒は患者のQOLに非常にかかわる疾患であり、非常にストレスになる。適切な治療により、早期解決が望まれる。非感染性の場合は、適切なステロイド薬の使用が必須である。

近年、梅毒の罹患率が上昇し、第1期梅毒の硬性下疳は感染局所にてできる浅い潰瘍で、無痛性とされているが、痛みを伴う場合も多く、外

陰潰瘍性疾患として外陰ヘルペスなどとの鑑別が非常に重要となっている。性行為感染症(STD)であるため、パートナーの治療含め、感染を拡大させない、また再発しないための指導も重要である。さらに、硬化性委縮性苔癬などの類癌病変もあり、注意深い経過観察が極めて重要な疾患もある。

今回、企画を立てるにあたって、主訴から疾患を想定して対応できるように、主訴から疾患を分類し、婦人科・皮膚科・泌尿器科からエキスパートの先生方に診断から治療まで網羅的に記載いただいた。一部、重複して記載されている疾患もあるが、重要な疾患であり、見逃さず様々な角度から分析する意義があると考え。

外陰疾患は日常的な疾患であるが、対応を誤ると長期化するばかりではなく、悪性疾患を見逃すことにつながる場合もある。今回の企画が、実地臨床医から研修医まで幅広い皆様の日常診療に役立ち、適切な診断・治療の一助になれば幸いである。

*Maki Kusumi, Osamu Tsutsumi 医療法人財団順和会山王病院